筑紫女学園大学リポジト

Elementary School Children and Community Life : A Case Study on Community in Fukuoka

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-10-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 安恒, 万記, YASUTSUNE, Maki メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/483

小学生を取り巻く地域コミュニティの現状と課題

−M小学校区を事例として−

安　恒　万　記

Elementary School Children and Community Life
“A Case Study on Community in Fukuoka”

Maki YASUTSUNE

1．はじめに

近年、子どもと家庭、地域、学校をめぐる環境は大きく変化してきている。家庭の教育力の低下が指摘されて久しいが、育児放棄や放任、過保護、過干渉といった極端な例だけでなく、育児期の母親が子どもを取り巻く環境に対する不満や不安を抱えていることは想像に難くない。また、地域とのかかわりにおいては、都市化がもたらした住環境の変化と職住分離、プライバシーへの配慮等が近隣関係の希薄化と匿名化に拍車をかけている。また、子ども会は少子化の影響もあり、団体数の減少、加入率の減少などの課題を抱えており、町内会の活性化・活力あるまちづくりもまた多くの地域の抱える悩みである。一方、学校においてもいじめや不登校の問題のみならず、自尊感情の乏しさや耐性の欠如などが指摘され、「生きる力」や「心の教育」が大きな課題となっている。平成11年の中央教育審議会の答申では『生活体験・自然体験が日本の子どもの心をはぐくむ』と題して、子どもたちの心の成長には、地域での豊かな体験が不可欠との指摘がなされ、緊急に取り組まなければならないものとして、「地域の子どもたちの体験機会を広げる」、「地域の子どもたちの遊び場をふやす」、「地域社会における子どもたちの体験活動などを支援する体制をつくる」などが提言されており、地域が取り組むべき課題は大きい。

本研究は、小学生を取り巻く地域コミュニティの現状を明らかにし、よりよい子ども環境の形成に資する資料を得ることを目的とする。本稿では福岡市の都心部に位置するM小学校区を取り上げ、小学校、地域（自治協議会や公民館など）などへのヒヤリングと小学生の保護者へのアンケート調査をもとに地域の現状と課題について考察する。

2．M小学校区の概要

（1）M小学校区の現況

M小学校区は福岡市の都心部に位置し、校区の大半は住宅系地域に用途地域指定されており、地

域密着型の商店街等の立地も伝統的な大きな祭りもなく、子どもを巻き込んだ地縁継承の難しさが顕著な校区であるといえる。また、低層住居専用地域がある程度のまとまりをもって広がる一方、企業の社宅等中層住宅も多く立地し、民間マンションを中心に高層化も進みつつある。平成22年度国勢調査によると校区の一戸建住宅率が13.1％、共同住宅率が86.0％（そのうち高層住宅率6.2％）であり、隣接する小学校区と比較すると一戸建て住宅率が高い傾向が見出せる。また、転勤世帯が多い一方で、古くからの居住者も多く、隣接する小学校区と比較すると核家族率が低く（37.8％）、三世代同居率が若干高い（1.25％）ものの、三世代同居の割合はごくわずかである。

校区の中央部を東西方向に走る国道をはじめ、東西方向の幹線道路が３本通る一方、歩道の確保されていない狭隘道路も多い。校区内に近隣公園が１か所、街区公園が３か所、幼児公園が３か所、都市緑地が１か所、緑道が２か所、と様々なタイプの公園が整備されている。また神社や社寺も多数点在するが、子どもの遊び場としての利用は少ない。

（２）Ｍ小学校の現状

Ｍ小学校は児童数665名（家庭数520）、各学年100人強で特別支援学級を加えて合計21クラスで構成される小学校である。平成15年に福岡市のモデル事業としてスタートした「放課後等の遊び場づくり事業（わいわい広場）」が平成15年より開設され、地域と協力しながら10年が経過している（平成26年現在74校で実施）。

また、平成25年度から福岡市「心輝くまちづくり事業」の「道徳教育推進モデル校」の指定を受け、学校・家庭・地域が一体となった道徳教育・健全育成の充実化が進められつつある。「“地域とつながりたい！！”は、“つながり隊”の笑顔から」をキャッチフレーズに、校区内の幹線道路花壇の花植えを４年生が地域で活動するグループ（後述するＮ会）とともに行なったり、全校児童による校区敬老会で配るカード作り、有志による敬老会での踊りの披露、学校ビオトープ周辺に設置するベンチづくり、校区体育祭ポスター作りなど、地域とつながるためのさまざまな仕掛けづくりが行われている。さらにその活動の様子を職員室前の廊下に掲示することにより児童の地域への意識を喚起しており、「つながり隊」へ参加する児童数は少しずつ増加している。

児童による「つながり隊」と地域の人たちとのつながりは、小学校校長、教頭に加え、地域住民から選出された「地域コーディネーター」３名による熱心な取り組みとともに広がりつつある。

（３）地域の現状

①校区自治協議会および子ども会の現状

「Ｍ小学校区自治協議会」は総務部、文化部、体育部、青少年育成部、防犯・防災部、交通安全部、福祉部、環境・衛生部、男女共同参画部、広報部で構成され、37町内会の町内会長と連携しな

がら様々な事業を展開している。しかしながら、福岡市の全体的な傾向[*1)]と同様に「役員のなり手がいない」現状を抱えており、広報部は平成22年度以降２年間空白が続き、自治協議会の地域に向けての情報が発信されず、「公民館だより」に地域事業のお知らせが掲載されるのみであった[*2)]。

子どもに関する事業としては、「デイキャンプ」や「子ども餅つき大会」、「どんど焼き」など直接的に子どもと関わる事業や「夜間パトロール」など間接的に子どもの環境支援のための事業などが青少年育成部を中心に運営されている。その「デイキャンプ」をはじめ「夏祭り」の子ども神輿や「敬老会」での踊り披露など、小学校からの働きかけにより表１に示すように平成24年度以降参加者が急激に増加している。とても喜ばしい現象である反面、それぞれの事業では人手不足を補うための様々な工夫を凝らしながらの厳しい運営を余儀なくされている。

当該小学校区では全国的な子ども会の衰退傾向と同様に、平成22年以降福岡市子ども会育成連絡会から脱退しており、単会子ども会への加入も全校児童の３割にも満たない現状である。公益社団法人子ども会連合会によると、平成21年度[*3)]の小学生の子ども会への加入率は全国平均で45.6％、福岡市平均で56.6％であり、これらと比較しても子ども会への加入率はとても低い。

また、「子ども会育成連絡会」がなくなったことによって、自治協議会は単会子ども会の情報を把握できなくなっており、町内会によっては町内会組織との連携もなされていないところも少なくはない。よって、従来子ども会に要請していた自治協議会の行事への案内および募集は、小学校を通じて要請文を全児童に配布することで行っている。自治協議会青少年育成部が主催する「デイキャンプ」や「ドッジビー」等子ども向けのさまざまな行事は単会子ども会とは関係なく運営されており、従来「単会子ども会」からの運営委員で構成された「子ども会育成連合会」を母体とした運営方式をとることが出来ない中で、平成25年度以降は民生児童委員や小学校「おやじとママの会」、小学校 PTA である地域委員等の助力を得て運営しているのが現状である。

加えて、参加した保護者の積極的な協力も期待できない現状は看過できない。自治協議会主催の事業が参加者みんなで運営するものではなく、お客様として参加する一般のイベント化しており、いずれの行事においても運営方法の模索は喫緊の課題である。

表１　自治協議会開催の主事業参加者数の推移

	H24	H25	H26
デイキャンプ	26名	100名	126名
夏祭り	56名	80名	台風により中止
敬老会（小学生の参加者）	台風により中止	３名	41名
体育祭	13チーム　690人 （小学生　203人）	13チーム　755人 （小学生　205人）	12チーム　714人 （小学生　213人）
防災訓練	150名	H26年度に繰り越し	350名

②公民館事業の現状

このような厳しい地域の現状ではあるが、当該小学校が平成25年度から福岡市「心輝くまちづくり事業」の「道徳教育推進モデル校」の指定を受けたことに伴い、公民館においても「公民館こころ輝くまちふくおか推進事業（市民局）」の指定を受け、地域の子どもたちへの積極的な働きかけ

が行われつつある。平成25年度は「子ども健全育成関連事業」と相乗りした形で表２に示すような事業が行われ、年度最後の事業「つくるクラブまつり」は小学校からの児童への呼びかけも功を奏して136名の参加があった。平成26年度は単独の事業として計画され、「まち歩きウォークラリー」は参加者58人（うち小学生30人）、「夏休み子ども広場」は12日間の開催で参加者385人（うち小学生221人）と参加者数は飛躍的に伸びている。更に昨年度好評を博した「つくるクラブまつり」が予定されており、今年度の事業としては３件である。いずれも地域住民に向けて一般公募された（原則、現役地域役職者を除く）「公民館サポーター」11名と１グループの助けを借りて運営されており、特徴的なのは公民館のサークル活動の一つである「卓球クラブ」がグループとしてサポーター登録をしていること、加えて「つくるクラブまつり」においては公民館サークルである「茶道部」、自治協議会諸団体の一つである「老人会」、小学校 PTA の OB などが積極的な支援をしていることである。小学生に対する地域的な支援の輪を構成する人材の発掘と活用が公民館を拠点に出来つつあることが伺える。

小学校からの働き掛けで公民館玄関ホールに置かれた「つながろうの木」には、小学生が地域の大人に向けて書いた葉っぱで作られた「木」に対して、地域の方からも「言葉かけの葉っぱ」を「木」に貼ってもらう試みがなされ、小学校と地域双方向の「つながろう」意識を可視化したものであろう。

表２　「公民館こころ輝くまちふくおか推進事業」の実施状況

H24年度		H25年度	
事業内容	参加者数	事業内容	参加者数
ダーツ	32人	まち歩きウォークラリー	58人
木のおもちゃづくり	45人	夏休み子ども広場（12日間）	385人
自分で作る朝ごはん	24人		
牛乳パックでハガキづくり	21人	つくるクラブまつり	予定
お菓子づくり	43人		
リサイクル工作	30人		
クリスマスリースづくり	36人		
干支飾りづくり	39人		
みそづくり	54人		
つくるクラブまつり	136人		

③その他校区内で活動する地域事業

また、当該校区においては福岡市「地域ぐるみ家庭教育支援事業」の助成を受けて活動している団体が平成25年度以降２団体あり、校区内での親子向けの様々なイベントを展開している。この事業は小・中学校区内の中で、家庭教育支援を必要としている保護者を中心に家庭教育に関する学習活動を行う地域の保護者グループへの支援事業であり、平成19年度から始まり、平成25年度には福岡市で31の団体、平成26年度には32の団体が事業支援を受けている。当該校区内で活動している２

団体の活動内容は表３に示すとおりである。

両団体とも家庭教育の向上を目的とした親のための学習会が中心であることは事業の目的からしても当然ながら、子ども会の組織率の低い当該校区において「親子」のネットワークづくりを意図した事業内容の特徴が伺える。Ｏ会は既存の単会子ども会をベースにして、その活動の幅を広げる目的で事業運営がされているが、事業内容によっては広く児童・保護者への参加を呼び掛けている。Ｔ会は当該校区の子ども会組織率の低さから、地域のネットワークからこぼれがちな親子のネットワーク化を図る目的で小・中・高校生の保護者で作った団体であり、地域ボランティアを会員数と同程度確保して様々な活動へのバックアップ体制を整えている。どちらのグループも保護者を中心とした組織力と実動力は弱いと言わざるを得ず、その支援の中心的な役割を担っているのはそれぞれ町内会長と民生児童委員である。

加えて「中央区花いっぱい運動」の助成を受けて発足したＮ会が単年度助成の後も活動を続け、校区内の幹線道路の花植えを定期的に行なっており、前述したように平成26年度は小学校の４年生との合同活動も行なっている。

表３　地域で活動するグループの事業

	Ｏ会		Ｔ会	
	事業内容	参加者数	事業内容	参加者数
親のための学習会	講演会「今子どもたちのために親がはじめること」	30人	語学勉強会	
			子どもの成長と親の関わり	29人
	講演会「子どもの育ちに大切なこと」	27人	絵本の読み聞かせ講座	44人
			思春期理解勉強会	25人
親子	親子ふれあい遊びの時間		親子料理教室	22人
	親子で歴史探訪	47人	体力アップ（ドッジボール）	60人
	野外調理とあそび	78人	今より速く走ろう	83人
	食育体験	37人	異文化学習会	26人

３．小学生保護者への意識調査

小学生を取り巻く地域コミュニティに対する保護者の意識を把握するために意識調査を行った。

（１）調査の概要

Ｍ小学校の在籍小学生の長子の保護者520名を対象に、平成26年９月22日（月）～９月30日（火）に実施した。調査用紙は各クラスの担任を通して配布してもらい、回収は職員室前の回収箱にて行った。配布数520に対し、回収数は225で回収率は43.3％であった。

表４　調査回収状況

配布数	有効回収数	有効回収率
520	225	43.3％

（2）調査回答者の子どもの属性

調査回答者は表5に示す小学生の保護者であり、子どもの学年および性別に大きな偏りはなかった。また、塾やおけいこごとなどへ行っている子どもの割合は9割弱を占め、その日数は週に3日が最も多く、週の半分以上を塾やおけいこ事に通っている子どもの割合も約3割である。

表5　調査対象者の概要

	男子	女子	不明	計
1年生	13	21		34
2年生	26	27	1	54
3年生	15	16		31
4年生	19	21		40
5年生	17	17		34
6年生	14	13		27
不明		1	4	5
計	104	116	5	225

表6　塾やおけいこごとなど

	行っている		行っていない		計
1年生	31	93.9%	2	6.1%	33
2年生	43	79.6%	11	20.4%	54
3年生	26	83.9%	5	16.1%	31
4年生	37	92.5%	3	7.5%	40
5年生	31	91.2%	3	8.8%	34
6年生	21	80.8%	5	19.2%	26
計	189	86.7%	29	13.3%	218

表7　塾やおけいこごとなどの日数

日数	人数（人）	割合（%）
1日	39	20.9%
2日	45	24.1%
3日	49	26.2%
4日	33	17.6%
5日	13	7.0%
6日	8	4.3%
計	187	100.0%

（3）子ども会への加入状況

調査回答者の子ども会への加入状況をみると、加入している世帯の割合は約3割である。その加入しない理由として、最も多いのは「子ども会がないから」であり半数近くを占めており、次いで「子ども会があるのかどうか知らないから」が2割弱である。単会子ども会が37町内会に対して9団体（うち3団体は2～3町内会の合併）に留まっている現状を浮き彫りにしている。また、子ども会育成連絡会からの脱退により、子ども会の情報を校区自治協議会が把握しきれておらず、その情報を子どもの保護者へも発信できていないことが要因と思われる。

次いで「子どもが忙しくて子ども会行事に参加できないから」と「親の手伝いが大変だから」がそれぞれ12.7%、12.1%であり、子どもと親のそれぞれの事情が見られる。自由記述として「仕事が忙しくて子どもを連れて行けない」や「もっと気軽に参加できる子ども会があればいい」、「あまりにも参加人数が少ないのでラジオ体操を小学校単位でやってほしい」、「いずれは役員などをしなければならないので」など保護者のためらいが多く見受けられる。

少子化が進む中で、子ども会の活動を支援するためには自治組織や行政区によらない新たな組織作りが重要であることは既往研究にて指摘されているが、単会子ども会を町内会をまたいで合併するには大きな労力を必要とし、子ども会育成連絡会も既になくなってしまった当校区においては単会子ども会の横の連携を促す仕組みがなく、子ども会再編への大きな動きも期待できないのが現状である。

表8　子ども会への加入状況

	加入	非加入	計
人数（人）	68	157	225
割合（%）	30.2%	69.8%	100.0%

表９　子ども会非加入の理由　　（N＝157）

	人数(人)	割合(%)
子ども会がないから	70	44.6%
子ども会に誘われなかったから	13	8.3%
子ども会があるのかどうか知らないから	31	19.7%
子どもが好まないから	11	7.0%
子ども会活動に魅力を感じないから	9	5.7%
子ども会の活動内容を知らないから	13	8.3%
子どもが忙しくて子ども会行事に参加できないから	20	12.7%
親の手伝いが大変だから	19	12.1%
なんとなく	10	6.4%
その他	18	11.5%

（４）地域行事への参加状況

調査回答者の地域行事への参加状況を見てみると、「校区の夏祭り」が最も多く過半数の子どもが参加している。次いで「校区の体育祭」で42.2%、「餅つき大会」が31.1%であり、当然ながら校区の大きな行事への参加率が高い。また、小学校の「ママとおやじの会」のイベントへの参加率は２割強であり、加えて「防災訓練」や「デイキャンプ」、「どんど焼き」など自治協議会事業への参加率と同程度（１割超）で地域内施設のバザーやキャンプ、地域内で活動する団体のイベントなどが挙がっている。特筆すべきは、昨年度まで「校区敬老会」への参加としては小学生３名の作文発表のみであったが、今年度より小学校３年生有志による「花笠おどり」と４年生有志による「ロックソーラン節」が加わったことにより、参加者が19名*4)（8.4%）と増加していることである。付け加えるならば、この３、４年生有志による行事参加は、参加者（当校区では75歳以上の高齢者が招待される）の笑顔を引き出し、加えて子どもの参加とともに保護者の見学が少なからずあり、「校

表10　地域行事への参加状況（N＝225）

	人数(人)	割合(%)
校区体育祭	95	42.2%
校区敬老会	19	8.4%
夏祭り	140	62.2%
ママとおやじの会	49	21.8%
デイキャンプ	37	16.4%
防災訓練	42	18.7%
「ともいきの会」のイベント	38	16.9%
餅つき大会	70	31.1%
どんど焼き	25	11.1%
子ども会の行事	48	21.3%
地域内施設のバザーやキャンプ	32	14.2%
その他	15	6.7%

小学生の作成した敬老会のカード

区敬老会」に活気を与えたことは確かである。またこのような直接参加に加えて、敬老会で配るカード作りは小学校で行われ、小学生および保護者の「参加」の実感は本調査に現れてはいないが、「敬老会参加者」である高齢者にとっては大きな喜びをもたらしたと思われ、この「カード」を持ち帰りたいとの希望が多かったこと[*5)]、その後小学校に「カード」へのお礼状が複数届けられており、小学校の目指すところの「地域とのつながり」は着実に進んでいることが伺える。

（5）地域活動への希望

保護者の地域活動への希薄さが少なからず見受けられる中で、地域行事への希望を聞いたところ、最も多いのが「特にない」で27.7％であった。実現可能かどうかは別にして地域行事への興味喚起の意味も込めての選択肢設定であったにもかかわらず、希望が「特にない」が最も多いことは、憂慮すべきことに思われる。次いで多かったのが「ソフトボールやドッジボールなどの球技大会」で21.8％、「ゲーム性のある地域探索」が20.0％、「異年齢児との交流可能な行事」が16.4％、「地域歴史探訪」が13.8％と続いている。

表11　希望する地域行事内容　（N＝225）

	人数（人）	割合（％）
キャンプ（宿泊型）	40	17.8％
ソフトボールやドッジボールなどの球技大会	49	21.8％
地域歴史探訪	31	13.8％
ゲーム性のある地域探索	45	20.0％
多世代交流の催し	16	7.1％
異年齢児との交流可能な行事	37	16.4％
ハンディキャップのある子どもも参加可能な行事	20	8.9％
特にない	62	27.6％
その他	12	5.3％

（6）地域で活動するグループに対する認知度

地域で活動するグループへの認知度を見てみると、「知らない」が最も多く71.1％である。一方「知っている」は13.3％であるものの、その内容は公民館活動や小学校PTAを母体とした「ママとおやじの会」なども含まれており、保護者の認識としては地域で活動するグループのくくりをあまり意識していないことが明らかとなった。加えて「興味がない」が6.7％と「参加してみたいと思っている」の2.7％を上回っており、地域活動への興味の希薄さが浮き彫りとなる結果であった。

表12　地域のグループへの認知度　（N＝225）

	人数（人）	割合（％）
知っている	30	13.3％
イベントに参加したことがある	18	8.0％
参加してみたいと思っている	6	2.7％
興味がない	15	6.7％
知らない	160	71.1％
その他	6	2.7％

（7）地域の人に対する認知度

では、小学生の保護者以外の地域の人に対する認知度はどうであろうか。表13に示す通り「お顔もお名前も知っている人がいる」が最も多く62.7%、次いで「名前はわからないがあいさつをする人がいる」が53.6%と過半数を占め、「親しく話をしたり、相談したりできる人がいる」や「子どもを預けることができる人がいる」など濃密な人間関係を地域で築いている保護者も少なからずいることがわかる。一方で「いない」と答えた保護者が49人（22.3%）おり、地域の中での孤立した子育ての現状を見ることができる。

表13　地域の人に対する認知度　　（N＝220）

	人数(人)	割合(%)
お顔もお名前も知っている人がいる	138	62.7%
名前はわからないがあいさつをする人がいる	118	53.6%
親しく話をしたり、相談したりできる人がいる	59	26.8%
子どもを預けることができる人がいる	40	18.2%
いない	49	22.3%
その他	5	2.3%

（8）子どもの環境についての保護者の意見

子育てや子どもの環境に関しての自由記述[*6)]を記入した保護者は37人であり、その意見からは「安全な環境」や「地域の見守り」といった地域の見守りで子どもの環境に対する安全を確保したいという望みと「地域交流」や「多世代交流」、「子ども会」といった繋がりを求める意見が多く見出された。加えて「多様な公園（ボール遊び可能）」など、学校以外の地域の遊び場への要求もあり、子どもの生活が学校や家庭だけでなく地域あってのものであり、そこに求められるものは多岐に渡っている。

4．まとめ

（1）小学校・地域・家庭のネットワーク化

以上、小学校での取り組み、地域の現状、保護者の意識等から、当該小学校区においても地域コミュニティへの帰属意識の低さや子ども会をも含めた地域活動の担い手不足、固定化による負担感の増、といった課題が見出された。

小学生にとって小学校・家庭・地域は欠かすことのできない生活の場である。この３つの場の連携がよりよい子どもの環境形成に資することは明らかであり、小学生保護者へのアンケート調査においても「安全な環境」「地域交流」「多世代交流」「地域の見守り」「子ども会」などに対する要求が見出される。PTA が主催する小学生の登校時の「朝のあいさつ運動」と自治協議会が運営する「防犯パトロールカー運行」と校門前での「朝のあいさつ」は平成24年度まで、保護者・自治協議会それぞれ単独で行われていたが、平成25年度からは PTA からの呼びかけで校区内のいくつかの

交差点等で保護者と町内会長との共同での見守りへと進化している。小学校・地域・家庭のネットワーク化のためには、大きな地域行事だけでなく日常的な地域内交流の積み重ねをどう増やしていくのか、双方向での取り組みが望まれる。

また、「子ども会」組織の再編は喫緊の課題であり、現存する９町内の子ども会に対する町内会・自治協議会の組織的なバックアップ体制の構築が望まれる。当該校区内の１町内会においては単会子ども会廃止の危機に際して町内会が「町内子どもの会」を立ち上げ、廃品回収や校区体育祭など地域の行事を町内会が運営する方式をとり、地道な勧誘作業を10年以上続けた結果、現在では校区体育祭への参加人数は校区最大となっている。この町内の方式は一つの成功事例ではあるが、町内会役員の熱い志とたゆまぬ努力があってのことであり、町内会活動の活性化とともに検討が必要である。

加えて、数少ない「子ども会」の横の連携を促すために子ども会のネットワーク化も進めるべきであろう。さらには「子ども会」のない町内居住（校区内37町内中28町内）の小学生と保護者のための代替となる組織作りも地域の大きな課題である。

（２）地域情報の受発信

また、小学校からの呼びかけで地域行事への小学生の参加が増加しているものの、保護者の地域事業への興味や期待の希薄さは顕著であった。保護者の地域事業への興味喚起のための事業内容の工夫とそれに加えて地域情報発信の強化が必要と思われる。また、「子ども会」に入っていない多くの保護者が「子ども会」があるかどうかすら知らない現状が明らかであり、そのためにも地域情報の発信内容も今後の検討課題である。さらに、子どもの地域活動を支援する人材の発掘と活用は喫緊の課題であり、地域のネットワークが希薄な中で口コミに大きな期待が寄せられないだけに、情報の発信だけでなく受信のための方策を検討することも課題としてあげられる。

（３）助成金制度の活用

当該校区においては、小学校、公民館、地域活動グループがそれぞれに工夫をこらし、福岡市の助成金を受けて活動しており、そのことによって地域活動が活性化していることが見出された。特に地域内の小さなグループが経済的基盤を持たない中で活動を継続することは非常に難しく、試行錯誤の活動の中で方向性を見失いがちであるが、助成金の活用によって活動の経済的バックアップが得られるのはもちろんであるが、活動の目的や方向性が明確化されるメリットがあげられる。しかしながら、助成金申請から報告書作成に至るまでの作業は簡単ではなく、活動の代表となるであろう町内会長や地域活動グループ立ち上げの代表者らによる情報交換会等、支援体制の構築が必要である。

おわりに

筆者がM小学校区自治協議会に関わって２年が経過した。子ども会育成連合会からの退会など自

治会活動の一部停滞期を過ぎ、青少年育成部長の交替や広報部の復活、小学校と公民館、自治協議会との連携強化とともに、小学生を取り巻く地域環境に変化の兆しが見えつつある。この変化を今後より良いものにするためには地域の現状と課題の整理が急がれ、問題意識の共有とまちづくりのビジョン作成、さらには行動に移すための方策と人づくりが必要である。さらに継続して関わりながら、活性化のためのビジョンづくり、さらには停滞期から活性化期へと変化する中での小学生の変化を追跡調査しながら、活性化方策の検証を進めたいと考える。

本研究にあたってヒアリング調査、アンケート調査等にご協力いただいた関係の方々に感謝いたします。

〔脚注〕

*1)福岡市における平成22年度自治協議会・自治会等アンケート結果によると、自治協議会の運営や活動にあたっての課題として最も多く挙げられたのが「役員のなり手がいない」で76.5%、次いで「運営を手伝う人がいない」で33.1%であった（N＝1,792）。

*2)平成24年度より広報部が新たに発足し、年に3回新聞を発行し、平成26年度からはブログが開設した。

*3)公益社団法人子ども会連合会は平成21年度以降加入者数調査を行っていない。

*4)実際は41名の参加があった。

*5)小学生による「敬老会」参加者へのカードはプログラムとセットで配布され、抽選会の景品との引換として使われたことによって、引換の際「持ち帰りたい」との希望が多く出されたことは「敬老会」の運営上の大きな反省点であった。

*6)子育てや子どもの環境に関する自由記述（原文ママ）からキーワードを抜き出したものが下表である。

ボール遊び場所	小学校以外に子ども達が ボール遊び などができる場所がないので、マンションのエントランスなどでゲーム機で遊んでいるのをよく見かけます。今の子ども達はかわいそうだなあと思います。
地域との関わり	子ども会に参加しているので、イベント等顔を出すこともありますが、もっと 地域の方 と深くかかわれる活動があるといいなと思います。
地域の見守り	うちの町内は子ども会の活動が最もさかんです。その為、登下校に 様々な方の目 があり、小学校まで遠い地区ですが安心しています。
運動見守り	毎日 外で体を動かしてほしい がゲームばかり。サッカーしていたがレベルアップの強化チームで本人が辞めたいと退部。野球は練習遅くまであり、土日も親の負担が大きいので、やらせたいけどやらせられない。スポーツ教室の野球は高額。毎日トレーニングのみのサッカーなどあればいいと思う。へたくそでも体を動かせるから。私自身、活発に運動していたので、まさか我が子がこんな状況でスポーツをすることができないとは思ってもみませんでした。特に男の子の親は、上手下手無しで 運動させてもらえる場所（監視人有） を望んでいる人は沢山います。
子ども会見守る	現在 子ども会 はありませんが、親の参加が難しい家庭が多く、地区の体育祭でも参加に偏りがあります。昔、子ども主体の地域子ども会がありましたが、そういうものを学校の中でたてわりを作って、集団下校などに活用したり、6年生が低学年も 見守る地域づくり をしたらどうでしょうか？
多世代交流	子供会 は毎回楽しみに参加しております。わたしたちの時はゲートボール、盆踊りで老人の方々と接する機会があり、いろいろなことを学ぶことができました。我が家も転勤族の核家族なので、 多世代交流 があればありがたいです。
子ども会負担	働いている母親が多くなり専業主婦に 行事の当番や雑務のしわ寄せ がきて重荷になっているような気がする。子どもだけ放任して祭り事の業務に協力的でない家庭が増えていると思う。
子ども会	福岡は教育や地域の関わりに熱心ですばらしいと思います。今からでも 子ども会に入会 してみようと思います。
安全	安全な環境 が一番の願いです。
地域交流	夏休みの ラジオ体操 を学校か、近くの公園で 地域の方々と交流 できるようなかたちでやっていただけるとうれしいです。
児童館	校区に 児童館 があれば、小さい子も遊べるし、小学生の 放課後の事を心配 しなくていいと思います。

地域交流	子供自身が楽しめる、子供目線を大切にした活動をサポートできる環境作りが大切だと思います。子供たちが楽しめて、彼らと共に 親同士＆地域の方々と交流 を持ち、地域活動の重要性を育みたく思う。工夫して、日常の中に子供も大人も交流できる場所と時間をもっていきたいと思う。有難いことに現在そんな環境に恵まれていて感謝しています。
ラジオ体操	ラジオ体操 がなくなった為、距離もあり信号がない（横断歩道の信号もない）大濠公園まで他地域の所に行かせていました。地域のラジオ体操を復活して欲しいです。子供が行きたがっています。学校であると良いです…。
安全	様々なものに参加できています。が、道中の 安全 については近年の連れ去り事件も含めて考えていく必要があると思う。
地域連携	安心安全 な校区は、 保護者、学校、地域の方々との連携 だと思います。今後も、どんどん色んなイベントや行事に参加、協力したい。
地域行事	夏休み 期間中にドッチボール大会などの イベント を行ってほしい。
ボール遊び	ボールを使って遊べる公園 が少ない。子供の声が騒音と言われてしまう状況が子育てを難しくしている。
預かり	何か突然困ったこと（例えば、自分（保護者）が事故など倒れた時、子供が学校から帰ったが親がいなく家に入れないなど）が起きた時、 子供を預かってくれる場所 、もしくは子供が直接行ける場所があればいいな…と。
安全	子どもが 安全 に楽しく場所が増えていったらと思います。
職場環境	地域の行事や活動は、親子で積極的に参加すべきだと思っています。残念ながら、働き方が変わる、あるいは、地域行事への積極的な参加を支援するような 職場環境 が必要だと思います。核家族でもあり、夫婦ともに余裕がありません。
子ども会	子ども会 の活動が町内により差があるのが子ども達がかわいそうに思うことがあります。子ども会がない町内に住み、嘆くお母さま方の声も聞きます。
子ども会見守り	子供会 がないので異学年との交流、そして保護者同志の助け合いに欠けている面がありとてもさみしく感じております。最近の事件等をみると 地域の見守り の大切さを痛感する中、なかなか始めるのは大変そうで腰が上がらないです。
活動への負担	南当仁小は転勤族が多く、人の入れかわりが激しいです。短期間であれば、親が週末に忙しいような活動には入らないと思います。共働きの家も多く、母親は週末にしか家事をちゃんとできないので時間にも余裕がありません。
遊び場	子どもが遊べる広い 公園 があればいいと思う。遊ぶ場所がないので、放課後は家、またはマンションのロビーなど（どこの家でも遊べないときはマンションのロビーで遊んでいる）で遊んでます。
遊び場	もう少し子供同士の 遊びの場 、子供同士の運動の場など機会があればよいと思う。
友達	南当仁小学校区ではない幼稚園に行かせ、あまり校区のお友達がいません。習い事をしてるお子さまも多く、時代なのか帰ってきてすぐに遊びに行く事がほぼありません。以前の校区では、外で遊んだりたくさんのお友達がいましたがなかなか・・・。都会だと難しいのでしょうか・・・。もっと 遊ばせてあげたい のが本音です。
近所づきあい	時代のせいか、自分たちの子どもの頃より、「ご近所づきあい」「子ども会」が希薄のなっているように感じます。
見守り	登校時の見守り、パトロール強化など 地域で安全取組 して頂けると安心です。
ボール遊び	校庭などで、野球やサッカークラブがある為に、小学校では遊べないというふうに子どもは感じている様です。クラブの練習が悪いとは思っていませんがもっとほかの子どもも遊べる環境にしてほしい。（公園も、なかなか ボール遊び ができないので）
地域交流	以前住んでいた地区は子ども会があったので 地域の人交流 があったが、校区内で引っ越した今住んでいる地区には子ども会がないので地域の人との交流がなくなった。
安全　ボール遊び	放課後、子ども達が 安全に遊べる場所 が少ない。特に男の子は ボール遊び が出来る公園がなく、学校も狭い為、結局家遊びが多くなり、心身共に伸び伸びと成長出来ないのでは、と心配であります。
見守り	このアンケートの主旨とずれているかもしれませんが、最近子供連れ去り等の大きな事件が多いので、もっと 地域ぐるみ で子供たちを守り、 安全安心な環境 づくり（公園などにカメラ設置など）をしていく必要があると思います。
地域交流	主人が単身赴任となってから、子ども達が週末の時間を地域のイベントに参加する事が増えました。子どもも楽しそうですし、多少なりとも 地域の方々と知り合えた り、私も助かっております。
匿名性	個人情報の関係で同じ学校の人でもどこに どんな方が住んでいらっしゃるのかなかなかわからない ので心配で子供を遊びに送り出す事もできません。大人のお付き合いはもっと大変そうです…
安全	今の子供達は皆、習い事をしていて、遊ぶ日がなかなかないようです。また。世の中が物騒なので、女の子ですし校区内でもあまり遠いところに遊びに行かすのは 心配 です。

〔参考文献〕

・山本清洋『大都市と子どもたち－遊び空間の現状と課題－』　東京都立大学出版会　2001

・吉岡眞知子『こども学序説』　ナカニシヤ出版　2009

・住田正樹・高島秀樹『子どもの発達と現代社会』　北樹出版　2002

・住田正樹『地域社会と教育－子どもの発達と地域社会－』　九州大学出版会　2001
・山本和人・大野清恵『子ども会および育成会活動の課題とその活動支援』国立オリンピック記念青少年総合センター研究紀要第７号　2007
・白井眞・古木美代子・姥貝荘一『子どもの地域生活と社会教育21世紀への展望』　学文社　1996

（やすつね　まき：人間科学科　人間形成専攻　准教授）